
真・恋姫＋無双 覇道凱旋伝

天叢雲

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

真・恋姫†無双 霸道凱旋伝

【Nコード】

N9645Y

【作者名】

天叢雲

【あらすじ】

世界を敵にし、死に絶えた“霸王”は新たな人生を歩む。

そこは三國志の・・・孫堅が女性の世界だった・・・。

ちなみにこれ、織斑家の最強親父の基になったやつです。

霸王、死すとのこと。

「……誰も……我^{オレ}を満たしてくれない」

男は絶望し、嘆く。

「己の強さ」。

周りの弱さに。

世界の脆さに。

「我が生きる意味も意味を為さない……我^{オレ}は何のために生きる？」

2

男は幼い頃から孤独だった。

類い稀なる才能。

他を圧倒する才能。

全てを凌駕する才能。

全てを知り得る才能。

それが男を孤独にした要因。

幼き日、男は両親に気味悪がられて捨てられ、今まで一人で生き抜いた。

「誰か我を楽しませる者はいないのか・・・」

男は渴望する。

自分の好敵手たる存在。

自分を理解してくれる存在。

自分を愛してくれる存在。

それらは男が手に入れたくて止まない存在。

「もう・・・我が人生に道はない。ここで果てるのもまた一興か・・・
ふっ。思えばなんともくだらぬ人生よ」

男は我が手を見る。

血にまみれた手。

戦い抜いた手。

傷がある手。

それは男の歩んだ道を示すものだった。

戦い。ただそれだけで生きてきた武人の証たる両手であった。

男の名はない。とうの昔に忘れ、捨て、そして呼ばれることがなくなつた。

「まあ、よい……我はもう疲れた……」

男は静かに目を閉じると周りに燃え盛る炎に身を委ねるようにした。

男に名はない。だが、男はこう呼ばれていた……。

“霸王”と・・・。

今、霸王の新たなる人生が始まる・・・。

霸王、外史の大地を踏むとのこと。

・・・む？ここは・・・なぜ我は生きている？

「・・・見渡す限りの大地、いや、荒野か・・・我は脱出したわけではないのだが」

確かにあの時、我は炎と共に我が城と灰に帰したはず。

なのになぜ我は生きている？

「まあ、よい。我が生きるならばそれは天からの命。生きている意味は探せばよいな」

我は立ち上がると服についた埃や土を払う。

服装も我が世界を統一し、破壊したときと変わらない血のように紅いロングコートのままだった。

他には変わった場所はないが妙に氣が溢れ、覇気は全盛期の我と同等かそれ以上に感じた。

あとは少し背が低くなり、声も少し高くなって生やしていた鬍もなくなっていた。

「・・・ふむ。わからないことだらけで混乱するな・・・まずは近くに村がないかを探すとしよう」

取り敢えず我は近くに村がないかを探すことにし、辺りを歩くことにした。

その間に、自分の体のスペックを改めて確認することにする。

氣もそうだが、今まで我の力となっていた覇氣もかなり強化されている。

腕力も脚力も生前よりも遥かに凌駕し、体が軽く感じる。

「・・・む？血の臭い・・・近くで戦いか？」

それはあり得ない。と思いたい。

我は世界を統一した際に争い事を無くすためにあらゆる武器を破壊し、人の体を傷つけにくくしたはず。

ならばなぜ？

我が出した結論が誤りであることを祈りたいものだな・・・。

我は血の臭いがする場所に一目散に駆ける。

やはり、スピードもかなり上がっており、風のように駆けることができた。

「ふむ。いい感じだ。これならばまだ戦えるであろう」

しばらく駆けること二十分。

前方から何か焼ける臭いと濃い血の臭いが強くなってきた。

同時に、村のようなものが見え、家が燃えてるのか、黒い煙がのぼっていた。

・・・また、賊か。

「まずは村に住むものの救出を最優先にし、賊がいるならば・・・叩き潰す」

最後に地面を思いつきり蹴ると村を見渡せる崖の上に飛び乗る。

そこから見えるは地獄。

昔ながらの農民のような服を着たものが多く、一方は刃物などを持って暴れており、略奪などをしていた。

「・・・む？時代が違うのか・・・？我が生きた国はあんなものではないはず・・・っと。まずは助けようか」

氣で体を強化すると高い崖の上から飛び降り、逃げる子供と母親を追う賊の前に来るよう調整する。

そして下卑じみた笑いをする賊を上から踵落としをし、体を真つ二つにした。

「へ？」

他の賊が呆けている間に一気に懐に踏み込み、二人を手刀で首を切り落とす。

血で体を汚すのも構わず、さらに賊に近づいて数を減らしていく。

「な、なんだ!？」

「戦いの最中だ。余所見などしては命を落とすぞ」

子供と母親らしき人物を追い掛けていたのは全部で七人。

三人は片付け、残るは・・・三人か。

賊の頭を握り潰しながら残った三人に目を向ける。

「ひ、ひい！？お前、なんなんだよ！？」

「貴様に名乗る名前はない・・・と言いたいところだが名前はないのでな・・・」

「やっちまえ！」

「・・・人の話は最後まで聞く気はないのか・・・まあ、よい」

剣を持って走ってくる賊にカウンターで顔を殴ると破裂し、首が吹き飛んだ。

さらに横から斬りかかる賊の剣を指ではさんで止めると剣を叩き折る。

驚く賊を無視して蹴りで腹に穴を開けて絶命させる。

「自己紹介、にはならぬが・・・」

瞬間、辺りに濃密な殺気と圧倒的な覇気が満ち、賊は怯え始める。

「我は霸王。とある国にて王として生き、今はただの武人だ」

さあ・・・我が覇道を見据えよ。怯える。刮目せよ！

霸王、武を振るつこのこと。

我が前を阻むは人の道より外れた賊の大群。

だが我にとって烏合の衆など取るに足りない。

「さあ・・・抗え。運がよければ命は救われるかもしれない」

「なめんなあああああ！！！」

見たところ賊の数は千かそれよりも上。

よくもまあ、ここまで集められたと感心する。

斬りかかる賊の首を掴むと一瞬で骨を容易くへし折り、投げ捨てる
と賊の中に突っ込む。

元々、我はカウンター型の戦い方をするのだが今回は体の調子を確
認するためにわざわざ攻めに回っている。

我が武器は体ひとつ、拳こそが我が唯一にして無比なる武器。

鍛え抜かれた肉体はそれだけで凶器となりうる。

その凶器を振るい、賊の四人を手刀で絶命させるとさらに近くの賊
の頭を両手で二人掴む。

「戦嵐虚狼」

氣で強化した腕から氣を飛ばすイメージをすると、突き出された腕から狼のような氣の塊が賊を食らう。

それに驚いて逃げようとするものがあるが、刺さっていた剣や矢を投げて足止めをすると一気に跳躍して頭を落とす。

「ば、バケモノだ！逃げろ！」

「うわああああああっ！！！」

数をまた三百ほど減らすと自分達は敵わないと悟ったのか我先にと逃げ始めた。

昔なら見逃したが経験により、逃がせばまたいつか襲うことは目に見えている。

だから……。

「逃がすと思うか……？我と敵対したことを後悔して逝くがよい」

拳以外に我は武器を扱える。

その中で槍を選択、賊のものであろう無骨な槍を手にとって神速の

早さで近付く。

槍を一振りすれば同時に七の命が消え、二振りすれば十の命が消えていく。

まるで機械のように槍を振るい、賊を殺す。

「わ、悪かった！もうしないからたすく」

「言い訳は閻魔にしる」

命乞いするものも容赦なく斬り殺す。

命乞いするならば最初からしなければいい話であるため、慈悲など与えない。

さらに斬る。薙ぐ。蹴る。突く。それにより、どんどん賊の数が減っていく。

五分もすれば賊の大群は跡形もなくななり、残るは賊のリーダーだけであった。

「ば、馬鹿な・・・千人はいたんだぞ・・・？なんでたった一人に・・・」

「我が武をもってすれば千など障害にはならん。さて・・・覚悟はいいか？」

「ま、待て！金ならやる！女か？女なら俺たちの根城に腐るほどいる！分けてやるから！助けてくれ頼む！」

「ほう……ならば案内してもらおうか」

「へ……へへへ。ならこちらですぜ旦那」

まだ他に人質がいるならば助けるのが先だな。

こいつを殺すのは救出したあとでいいだろう……残った人生を楽しむがいい……。

髭を生やすリーダーの後を追うように山の方向に歩いていく。

洞窟らしき場所が見えると氣を少しだけ放出しておく。

……かなりいるな。人質に混じって賊もかなりいると感じた。

霸王、霸道を魅せるこのじつ。

「へ、へへへ。引つ掛かったな！ここにはまだ二千ほど部下がいる！てめえもこれでおしまいだ！」

「・・・ふん。予測など容易い。貴様がこつするだろうとはわかりきったことだ」

案の定、洞窟らしき場所の中には武器やらなんやらを持った賊が待ち構えていた。

数は二千と言っていたが感じるのは多くて千ほどしかない。

この程度なら疲れていない我にとっては赤子の手を捻るより容易いことじつ。

「・・・さて。残された人生は楽しめたか？」

「は？てめえの人生だろ？」

「頭がイカれたか？ぎゃははははは！」

賊が気持ち悪い笑いをして高笑いをする。

その一人がニヤニヤと笑いながら近付き、剣を首に突きつけてきた。

「おい兄ちゃん。珍しい服着てるな。それをよこしたら助けてやる
うか？」

「・・・遺言はそれだけだな？」

「は？面白い冗談d」

首に剣を突きつけて脅す賊の顔を掌で押すように叩くと顔が弾けと
んだ。

それを開戦と取ったのか賊が一斉に飛び掛かるように走ってきた。

「死ね！」

「三人以上でかかれ！絶対に一対一で戦うな！」

「・・・ふむ。知識はあるようだな」

迫る刃を避けながら骨を外したり、叩き折ったりしながら先々とリ
ーダーらしき賊に近付いていく。

むう・・・やはり鈍っているな。昔なら少し手を出すだけで関節を
外せたんだが・・・。

骨が折れる、砕ける、外れる音を立てながら続々と戦闘不能にして

いくと賊から焦りを感じた。

そこにつけこみ、さらにギアを上げて賊を殺していく。

「くそっ！死ね！死ねよ！」

「甘い」

焦る顔をする賊の剣をまた指ではさんで止めるとそのまま蹴りで首の骨を折った。

慌てる賊のリーダー。

そして我はただ黙々と命を消すように殴り、時には奪った武器で戦う。

「お、おいてめえら！しっかりしろよ！」

「ですが頭！あいつは強すぎますぜ！？」

「いいからなんとかしろ！俺を守れ！」

「仙覇瞬連殺」

奪った剣を腰だめに構え、居合いで一気に周りの五十の賊の首を斬り落とす。

それにより、またもリーダーは逃げようとするが死体に足を取られ、逃げられずに転ぶ。

転んだリーダーの背中を踏むと先が少し欠けた剣を首に添える。

「さて・・・残るはまたお前だけだ」

「あ、あひい・・・」

「我は機会を与え、貴様はその機会を無下にした。ならば殺されても文句は言えんな？」

「ゆ、ゆるしt」

「死ね」

ザシュッ！

首を斬ると持っていた剣を捨て、氣を感じる場所に歩いていく。

その後ろは・・・屍の山しかなかった。

「・・・これはひどいな」

歩いてすぐに目的地に着いた。

そこには大きな牢屋があり、中には女性が怯えながら抱き合い、我を見ていた。

感じる気はここだけ・・・ならば生き残ったもの、いるものはここに纏められていたということか。

牢屋に近付き、大きな鍵を素手で握り潰すと牢屋の扉を開ける。

「逃げる。貴様らはもう自由、拐った賊は全て片付けておいた」

女性達は呆然としていたが私の言葉を理解すると泣き始める。

次々と牢屋から飛び出し、礼を言いながら外に出てきた。

「ありがとうございます。ありがとうございます・・・」

「もう助からないかと・・・」

「気にするな。村まで送ろう。服を着てないものは何かで代用しろ」

宝物庫らしき場所には服やら宝石やら武器やらとかなり溜め込んでいたものがあつた。

その中から綺麗な服だけを裸の女性に渡すと我は顔についた血を口ングコートで拭くと女性達をさっきの村まで送ることにした。

道中、女性達から話を聞いてここがどこかを理解した。

「（・・・まさか三國志の世界とは・・・なぜ我はこんな場所に来たのだ？）」

ここはどうやら呉となる場所の領地らしく、孫堅なる王が治めてると女性は言った。

詳しく三國志を知らないがさすがに最低限の情報は知り得てる。

孫堅の息子である孫策、魏の曹操、蜀の劉備に名のある関羽や趙雲、張飛、孫権に黄蓋などは知っている。

・・・むやみやたらに三國志の歴史には介入は許されんな・・・。

「あ、あの・・・貴方のお名前は？」

「む？すまないが我に名前は無い。生まれてからはあったようだが
とうの昔に忘れ去った」

「え！？名前が！？なら今まではどうしてたんですか！？」

「二つ名で呼ばれていた。誰もがな」

「ちなみにその名前は・・・？」

「やれやれ。さつきからよく質問をするな。」

「まあ、我が名はこれしかないから名乗るしかあるまい。」

「名乗れば曹操に目をつけられるが無視するか叩きのめすとしよう。」

「霸王・・・」

「そう。我は覇道を突き進む王たる存在、霸王だ」

「その日から三國から狙われるようになるとは我はまだ知らなかった。」

そして三國志の時代と大きく、小さく離れた世界だと知るのもまた
知らなかった。

霸王、虎と出会つたのこと。

我が賊を蹴散らしてから優に二ヶ月が過ぎた。

その間に我は人里から離れた場所で暮らしながら時折、賊を退治して報奨金をもらっている。

「ねーねー少しは愛想よくできないの貴方は？」

「・・・」

「ぶーぶー！少しは興味を持ちなさいよー！」

「五月蠅いぞ。我は読書中だ。邪魔をするならまた叩きのめすぞ美蓮」

「や、やーね。冗談よ冗談。貴方と戦うと絶望しかないからね・・・それより何を読んでいるの？」

「兵法大集全だ。なかなか勉強になる」

「・・・貴方も頭が固い軍師になるつもりかしら？」

「どこぞの突撃戦闘狂の馬鹿にはわからんだろうがな」

なによー！と叫ぶ女を無視して人里にて購入した兵法大集全に没頭

する。

女の名は美蓮^{めいれん}。ピンクの髪に褐色肌を持つ美女に部類されるであろう美しい女性である。

なんと美蓮はあの孫堅だということがわかった。

最初の出会いは美蓮側が勘違いで襲ってきたという最悪のファーストコンタクトであった。

無論、我は最初は抵抗せずに避けていたのだが周りの被害も考えずに暴れる美蓮を鎮圧するために反撃し、一方的に叩きのめした。

「それで霸王様？貴方はこれからどうするの？」

「知らん。我は争い事に飛び込む気など全くないのでな」

「……たとえ国が乱れても？」

「我には関係ない。そもその原因は現皇帝だろう。政治もろくにできないやつには手を貸す気は一切皆無だ」

ペラリと兵法大集全をめくりながら美蓮の言葉をバツサリと切り捨てた。

我がいた世界ならまだしも、我はこの世界とは全く無関係。売られた喧嘩以外に戦うつもりはない。

「冷たいわね。こんな美女に頼まれてるのになんて冷たいの」

「・・・ハッ」

「鼻で笑われた！？どんだけ冷たいのよ霸王！」

そしてこの三国志の世界に気付いたことがある。

それは真名^{まな}。

真名と呼ばれるものがあり、それは人の真実の名前であり、尊いものだと美蓮から聞いた。

本人に許可なく真名を呼べば首を斬られても文句は言えないという暗黙のルールがあったのだ。

無論、孫堅にも真名はあり、美蓮というらしいがなぜか我は美蓮から真名を呼ぶことを許された。

本人曰く、気に入ったから受け取って だそうだが我にとってはただの迷惑にしかならん。

「それに貴方に真名も姓も字もないなんて信じられないわ」

「忘れたからな。もう名を捨ててから長い年月が流れた・・・無くても苦労はしない」

「・・・辛くないの？名前がなくて不便じゃない？」

「霸王で十分だ。長い間、親しんだものだから今さら変えても慣れないだけだ」

美蓮の目は子を心配するような目をしているが美蓮が我と対等にあ
るならばとうの昔に救われている。

我は兵法大集全を閉じると座っていた木から飛び降りて美蓮と背中
合わせをするように美蓮が寄り掛かる木の反対側に座る。

「・・・貴方は・・・今までどんな人生を歩んだの・・・？」

「お前程度に理解されないような人生だ。たたかい理解しようとしても優し
いお前には無理だ」

「霸王・・・貴方・・・」

「今日は帰る。また兵とかに見つかるのは嫌なんでな」

そう言うと我は木から離れ、美蓮の本拠地の城から出る。

誘いを受けてたまに来る程度だが最近では美蓮に無理矢理連れ出され
たりするからどうにもならん。

「・・・霸王、貴方は・・・」

そんな美蓮の咳きは風に消え、我には届かなかった。

そして我は住み処とする廃墟となった城に帰ることにした。

まだ廃墟となつてから時間が経ってないのか、新品のように佇んでいた。

「・・・我だ。道を開ける」

「ぐるるっ」

なのに誰もいないのはそこに絶対強者が住み始めたからだろう。

我がここに訪れた時、全長三mはあるかないかの黒い毛を持つ狼がそこを支配していたからおそらくはそれから逃げるために捨てたと推測する。

城が見える位置にその狼は我を迎えてくれ、道を開けるように城に共に歩いていった。

「今日はなにもなかったか？」

「がるっ」

「・・・む？また賊が来たのか？しつこい奴等だな・・・いつも通

りに殲滅したのだな？」

「ぐるっ！」

リーダーの狼なのか、戦闘能力はすば抜けており、賊程度ならすぐに殲滅するほどである。

前に美蓮と戦って互角以上の戦いをしていたから戦闘センスもまた、すば抜けているのだらう。

ここに訪れた時にいきなり平伏してすぐになついたので戸惑ったのはいい思い出だ。

「今日は美蓮から酒をもらった。飲もうか」

「ぐるっ！」

今ではいい相棒としてこの城に住んでいる。

意思伝達もできるので家族のように接しているがやはり狼。我が心は物足りない気もする。

・・・さて。またドブネズミがいるようだから排除するか。

霸王、子を拾うとのこと。

美蓮との妙な関係が始まってからまたしばらく時が流れた。

我は前のように常に命を狙われる立場ではないので狼である猩紅ウルクとのんびりと城で過ごしている。

時折、我が住み処である城を狙って賊が攻めてくるが全て返り討ちにしている。

その賊の中には賞金があるやつもいたため、金や食料も手に入っている。

そう・・・我に似合わない生活してたのだが・・・。

「・・・・・・・・猩紅、なんだそれは」

「がっつ」

「拾っただと？猫や犬じゃあるまいし・・・元の場所にもど・・・わかったわかった。我が悪かったから睨むな」

なぜか猩紅が子供を二人、連れてきた。

・・・拾ったと言っていたがまさか戦災孤児か何かか？

今のご時世だ。賊が略奪、殺戮などを行っているため、家族や恋人を失う者もいる。

この子供二人もそれに当てはまるのか……？

どちらにせよ、我は子供は好かん。接し方など、知るわけがない。

「ぐるっ！」

「なに？我に育てると言うのか？猩紅、我は子育てなどできぬぞ……仕方がない。美蓮に相談を試みようか」

「ぎゃっ」

「……む？美蓮からの文ふみだと？」

猩紅はどこからか、置まれた紙を取り出して口でくわえながら我に渡してきた。

「……しばらく遠征に出ます。できたら私を思いながら待っていてね。だと……！美蓮、得意の勘とやらで逃げたな……！」

くしゃり。と文を握り潰すと氣で完全に消滅させた。

兎にも角も、この子供はどうするべきか……まずは事情を聞くべきなのか？

「猩紅、詳しく説明しろ。この二人はどこで拾ったのだ？」

「ぐう……」

猩紅によれば、いつもの狩りをしていると川から流れてきたらしい。

二人のうち、片方が片方を引っ張って陸に上がってなんとか助かったのを猩紅は見たようだ。

猩紅は放っておけずに背中に乗せて連れてきた。といった感じである。

「……水辺まで行ったのか猩紅……？」

「がっつ」

ここから川がある場所は優に30？は離れてるぞ……？

何はともあれ、まずはこの二人をどこかに寝かせるか。

体も冷えてるようだし、毛布や着替えも用意しておくか。

「というわけで寄越せ。後は飯だ」

「・・・お主、いきなり来てそれか？まあ、儂は構わんがな・・・
ところで堅殿からは聞いておらぬか？遠征に行ったのだが」

「文で知らせてきたよ。それより子育てのやり方も知りたい。教えてくれぬか？」

「・・・待て待て待て。いまなんと言った？子育て？」

「猩紅が拾ったのでな。我が育てることにしたのだ」

「・・・信じられんのお・・・あの堅殿を破った霸王が子育てとは・・・」

「どうするんだ。教えるか、教えぬか」

我が来た場所は美蓮の城である。

そこに美蓮、孫堅の部下にして親友ともいえる女性があり、我はそいつの力を借りに来たのだ。

名は黄蓋。真名を祭さいと言う。

孫堅に続き、まさか黄蓋すらも女性とは・・・まさかここは三國志の世界とは違うのか？とつくづく思う。

「ほれ。これを参考に作るといい。後は毛布やら着替えも用意しておいたぞ」

「感謝する。美蓮が戻ったらまた酒を飲み交わそう」

「ほほお！なら儂の知る最高の酒を用意して待っておるぞ！」

「楽しみにしてる」

「うむ。ではな霸王」

毛布や着替えをつめた袋を担ぎ、祭に作ってもらった握り飯と肉まんなどをつめた袋もまた、肩に担いで城に戻る。

城に戻り、二人がいる場所に来ると寝ていた二人は起きていた。

「む。目が覚めたか」

「っ！おまえ、だれだ！？」

「そう警戒するな。我は貴様らを助けただけのこと・・・腹は空いてないか？握り飯はあるが食べるか？」

二人、いや黒い髪をした方の少女が警戒心を露にして我を睨んでいた。

もう一人の赤い髪をした少女は怯えているのか、黒い髪の少女にしがみついていた。

我は少女から発せられた殺気を無視して握り飯を渡し、着替えを適

当に放り投げた。

「適当に食べ。我は特になにもしないし、ここにいっても構わない」

「・・・何が狙いだ・・・！」

「狙いなどない。貴様らを助けた猩紅が拾ってきたのを我は助けるだけだ」

「猩紅・・・？」

「この狼だ。ここに置いておくから適当にくつろぐといい。我に会いたければ猩紅に言え。案内をしてくれる」

我はその部屋から出るといつもいる玉座に腰掛けて適当にくつろぐ。美蓮から分けてもらった酒を軽く飲みながらついでに取ってきた猪の丸焼きを食らう。

「・・・うむう・・・どうにも我は料理は苦手だ・・・」

祭が作る料理は美味しいのだが、我のはどうも風味が足りないというか、何かが足りない気がする。

猪の丸焼き、祭が作ると胡椒やら風味が効いたものなのだが、我のはただの肉の味しかないのだ。

丸焼きを食すと我は氣で制空^{けっかい}圏を張りながら眠ることにした。

今まであまり寝ていなかったせいか、反動で妙に睡眠欲が普通よりとんでもないので眠ることが多くなっている。

我はそのまま慣れない眠りの中に沈んでいった。

霸王、鍛えるとのこと。

猩紅が拾った子供を保護？してからまた時が進み、若返った年はまた時を刻んだ。

子供・・・二人の真名は百代ももよと一子かずこといい、同じ城に住みながらも、あまり干渉はしないという妙な関係を築いている。

たまに猩紅と戯れる二人を見るくらいで我は鈍らぬよう、体を鍛え直しながら毎日を過ごす。

幸い、賊や美蓮からいただいた武器があるので型を確かめるのに苦労はしなかった。

「ふっ！ふっ！ふっ！ふっ！」

無骨な剣を高速で振りながら感覚を確かめながらさらに振る。

一応、我は剣術、槍術、弓術、刀術などとあらゆる武術を会得しているため、オールラウンドタイプである。

得意な武器と聞かれると我は双剣、槍、拳といった近接戦闘がそうだが、我がいた場所では銃もあったため、我はそれも得意としている。

両刃剣を手で遊ぶように振り回しながら上に投げ、鞘を構えてそこ

に仕舞う。

「……ふむ。こちらは問題はないな……次は槍で試すか」

地面に刺さるそれを手に取るとクルリと回しながら手に取った。

両手でしっかりと握ると感覚を確かめるように握り直し、構えるとゆっくりと息を吸い、ゆっくり吐く。

「……シッ！」

まずは右に薙ぎ払うように動かし、次に袈裟斬りで斬り上げるように振る。

そこから突き、振り下ろし、振り上げ、右に左に薙ぎ払い、さらには頭上で片手で回しながらあらゆる攻撃法を試しながら確かめる。

時折、片手で持ちながら螺旋回転をしながら突いたり我が編み出した槍術の奥義も繰り出す。

……ふむ。なかなか……やはり槍術は我にしっかりと来るな。

「霸王迅雷槍」

最後に槍に高密度の氣を込めて投擲すると刺さった岩が爆発を起し、槍は帯電しながら地面に刺さった姿を見せた。

近付いて槍を抜いてみると先の刃はボロボロでもう使い物にはなりそうになかった。

「……やはり我が奥義には耐えられぬか……それで、いつまで隠れて見ているのだ？」

槍の刃の部分だけを取り外しながら後ろの木に目を向けると、そこには猩紅が拾った子供二人が顔を出しながらこちらを覗いているのが見えた。

黒い髪の少女、百代はばつが悪そうな顔をし、赤い髪の少女、一子はおどおどしながら百代にしがみつきながら二人で出てきた。

「どうした？」

「あ、いや……何をしてるんだ？」

「見てわからぬか？我は武術が鈍らぬように鍛えてるだけのこと。貴様らはなぜ覗いていたのだ？」

「……妙にでかい氣を感じたから気になっただけだよ……」

「……ほう。百代は氣を感じられるのか。」

人里、美蓮がいる城下町の人間ですら、私の氣を使っても気付かなかった。

つまり、百代には武術を振るう才能があるということ。おそらく、どこかの武術家の子なのかもしれない。

美蓮や祭でやっと感じられるレベルに抑えていたのに感じられるのは稀代の才能の持ち主かもしれない。

「まあ、よい。我はまだしばらくやるつもりだが、貴様らは少し離れて見ているといい」

「誰がお前のなんか・・・」

少し曲がった刀に似た曲刀を二本掴むと逆手に持って構える。

まず、大きく足を踏み出して右の剣を左に斬り上げるように振るう。

仮想の相手としては過去に戦った中で強い部類に入る美蓮と祭のコンビをイメージする。

振るわれる美蓮の剣をクロスさせて防ぐと顔を少し横にずらして祭の矢を避けると大きく右に踏み込み、美蓮の剣を弾きながら足で蹴り飛ばす。

そこから、縮地法で弓を構える祭の前に移動すると祭は剣を抜き、罅迫り合いをする。

「・・・なんて鮮やかな・・・」

「・・・すごい・・・相手のイメージが見える・・・」

「（やはり才能か・・・百代は武人としての才能が溢れている。そして一子もまた百代に劣るが才能があるな）」

それから約五分ほど、仮想の美蓮と祭と戦うと氣を込めすぎたのか、双剣がボロボロになってしまい、破棄した。

「ふう・・・まだまだ我も鈍ってはいないようだな」

「おい！」

「む？なんだ百代」

「私と戦え！お前となら私は答えを見つけられそうだ！」

・・・まあ、いいか。たまには仮想の敵ではなく、生身の武人を相手にするのもいいだろう。

「ふむ。構わんよ。百代、貴様は武器は使うのか？」

「ない！私は拳で戦う主義だ！」

「……なら我も無手で戦つとしようか」

百代が我と対峙するように前に出ると、一子はいわいながら猩紅に宥められていた。

さて……まずは百代がどれほどの実力を持ってるか確かめようか。

霸王、戦つとのこと。

「さあ、いつでもかかってくるといい」

「後悔すんなよ！私はなかなか強い！」

「それは楽しみだな」

まず、普通に右手で殴りかかるのを左手でいなしながら避けると裏拳を百代に放つ。

百代は頭を下げて避けると足を払うように伏せながら足を回す。

それを手を使わずに側転をしながら避けると、伏せた百代に手を伸ばすが、手を払うように払い除けられ、立ち上がったまま殴りかかる。

「・・・ふむ。体の使い方は合格だな」

「何をぶつくさど！」

「ああ、すまぬな。貴様の実力が予想以上で少し驚いているだけだ」

「そんな余裕、いつまで持つかな!？」

「せめて我を本気にしてくれ。我は貴様に期待をしておるのだ」

シユババババとラツシユで殴りかかる百代を捌きながらそう、会話をしながら戦う。

ふむ。やはり才能はあるな。この年でここまで動けるのは驚嘆に値する。

手だけではなく、足も混ぜ合わせながら攻撃をする百代を慌てもせず捌く。

「（嘘だろ！？私の攻撃がほとんど防がれてる！？）」

「どうした？まさか貴様の實力はこの程度なのか？」

「っ！誰が！」

私は焦っていた。

私がどれだけ攻撃をしても、あいつは涼しい顔をして片手で捌きながら反撃はせずにただ防いでいた。

嘘だ・・・私は強いんだ！あんなやつに私は負けないんだ！

「うわああああああああつ！！」

「感情に身を任せては未熟な貴様では身を滅ぼすぞ」

あいつはなおも涼しい顔をしてさらに捌きながら私を嘲笑うように見ていた。

だんだん私は殺す気で拳を振るうがまだなお、あいつは涼しい顔を崩さない。

「・・・ふう。期待外れだ百代。我はお前に期待をしていたのだが・・・」

「うるさいうるさいうるさい！」

「・・・仕方があるまい。我が霸道を見据えよ、そして知れ。お前が感じたことのない恐怖をな・・・」

私は渾身の力で殴るが、あいつは指一本でそれを受け止め、心底ガツカリしたような顔をして私は見る。

空いた手を握り締めるように構えると、あいつから今まで感じたことがない殺気と覇気が溢れ出して私は恐怖した。

怖い。私は素直にそう思い、生まれてはじめて恐怖を知り、怯えた。

「そう。その感情は間違っていない。恐怖を知ってさらに強くなれる・・・足掻け百代、そして更なる高みに登り、我と同じ場所に来い」

あいつは私をまるで愛しい子を見るような、そんな優しい目をしながら私を見つめていた。

・・・そうか。私は勘違いをしていた。こいつはただ、私達を育てようとして保護したのか・・・。

「我が奥義の一部を見せてやる。目を覚ませばまた我とどうするか話し合おう百代・・・」

「・・・ああ。今までごめん」

「構わぬ・・・では、いくぞ」

あいつの右手に膨大な気が宿ると紅く燃えるように気が揺らぎ、私を圧倒する。

我流霸王拳術奥義“霸王断空拳”

あいつ・・・いや、あの人が右拳を突き出すと光が目の前に広がり、私は意識を失った。

「ふう……やはり加減が難しいものだな」

「ね、ねえさま！」

「ぐぐるっ」

「む？やりすぎだと？ああでもしなければ間違いなく百代は修羅の道を行っていたのだぞ？ならば目を覚まさせてやるのが私の仕事だろう。猩紅よ」

「がうっ」

「わかったわかった。我がやり過ぎた。謝ろう・・・だが、百代は才能に溢れている。あのままでは自分の身を滅ぼすことになるということだけはわかっていてくれ」

現に、我がいたあの国ではそういった輩は腐るほどいたからな。

自分の武に酔いしれて無意味な殺戮を繰り返してたやつもいた。

兎も角。百代をそのような道に進ませないように導くのが今の私の使命だろう。

・・・弟子を取るのをはじめだから不安しか感じない・・・。

霸王、弟子を取るとのこと。

「はっ！はっ！はっ！はっ！」

「てやあ！たあ！」

「………なかなか面白いな」

「という、か！さっき、から、集中、して、ない、だろ！」

「む？貴様らの今の實力じゃ我を本気にさせることは敵わん。前に見せた霸王断空拳もかなり手加減をしてたからな」

「ちくしょー！」

「ねえさま！落ち着いて戦って！」

「隙ありだ一子」

「え？きやあ！？」

我は今、百代と一子を相手に模擬戦をしながら鍛えている。

前に百代を完膚なきまで叩きのめしたあと、百代は頭を下げて弟子にしてほしいと言ってきた。

まあ、我は断るつもりもないので一子と共に弟子を取り、最近は一

人を鍛えるのが日課になっている。

だが我は二人を凌ぐ實力を持つため、こうして片手に書物を持ちながら読んでいても捌ける。

我は訓練用の木の棒を持ちながら戦う一子を棒ごと掴み、放り投げると百代にも近付いて戦闘不能にする。

「あー！また負けたー！」

「うー。私なんか手も足も出なかった・・・」

「気に病むな。貴様らは着々と實力を付けてきている。焦らずに経験を積みれば自ずと力は身に付くぞ」

「・・・というかあんたは私達を相手にしても息も切らさないなんてなんなんだよ・・・」

「實力があるからこそ、我は霸王の称号を掲げているのだ。経験も實力も年期も貴様らとは桁違いだ」

そう言いながら我は左手に持つ書物をペラペラとめくりながら読み終え、パタリと閉じる。

それから書物を仕舞い、新しい書物をまた手に取って読み始める。

「・・・それ、わかるのか？私はよくわからん」

「孫子だ。知らなくては恥ずかしいぞ百代・・・取り敢えず貴様らは好きにしる。今日はこれにて訓練を終える」

「う・・・な、なら私とまた戦って「却下だ」なんだよちくしょー！」

「あ、ねえさまー！」

「一子、猩紅と追いつけてこい。我はまた人里に向かう」

「あ、し、師匠!？」

借りた分だけの書物を右腕で持ち、左手にまだ読んでない書物を読みながらその場から離れ、人里・・・美蓮の城下町に歩いていく。

途中にある小さな村にて馬を借り、走らせながら書物を読み漁る。

「・・・この世界ではあまり氣は知られていないようだな・・・やはりここは過去の外史（平行世界）で間違いなさそうだ」

「なにぶつくさ言ってるのよ霸王。前を向いて走らなきゃ危ないわよっ。」

「感^みえてるから問題はない。貴様は何をしている美蓮」

「賊の討伐の帰りよ。国からの命令だから仕方なくね」

「成る程」

「・・・また読んでるの？面白いのかしらそれは？」

「新しい発見があるからなかなか面白いぞ。戦うしか脳がない貴様にはわからんだろうがな」

「ぶーぶー！なによそれー！」

「要するに貴様は馬鹿だということだ」

「うえーん！霸王が苛めるよ祭ー！」

知らぬ。馬鹿なのは美蓮自信が悪いし、そんなことをされても我は揺らがん。

「・・・霸王、頼むから堅殿をあまりいじめんとしてくれ」

「善処しよう。それとこれらを返そう、なかなか面白かったぞ」

「・・・？まだ返さなくてよいんじゃが・・・いいのか？」

「ああ。全部読み終えたからな。暇を潰せて助かったぞ」

書物を馬に乗って歩く祭に渡すと我は馬の上で後ろを向くように体を動かし、馬の上で背を預けるように寝る。

少し体勢が安定しないがまあ、ゆったりできるからいい。

「まあ、楽しめたのならよいのだが・・・」

「後は我が持っていた本を読むとするから借りるのはもういい。今まですまなかつたな」

「いやいや、儂じゃなくて堅殿が先代から持っていた書物を貸しに出すのを許可しただけじゃよ。感謝なら堅殿に・・・なんで嫌そうな顔をする？」

これは美蓮に貸しを作ったことになるだろう。

だとすれば美蓮は理不尽ともいえるような要求をするか、また模擬戦に付き合えと言いそうぞ嫌なのだ。

「なんか貶された気がするわ・・・」

「貶してるのだ阿呆。貴様の今までの行動を思い返してみる。何かと戦いか酒か酒か酒か酒か酒かだろう」

「うえーん！もう王様なんかやめてやるー！」

「堅殿！？待ってくださいね！」

「では我も帰ろう。祭、ついでだから貴様の酒もいただいでおくぞ」

泣きながら去る美蓮を追い掛ける兵士、それを見てまた、自分も追
い掛ける祭を見届け、我は再び馬を駆り、城に帰る……のだが。

「……百代、一子、猩紅……なんだその子供ガキは？」

「なんかついてきた」

「うん」

「がっ」

「……恋。よろしく……」

……取り敢えず私の心労はさらに増えることになるだろうな。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9645y/>

真・恋姫十無双 霸道凱旋伝

2011年12月7日00時53分発行